

歯科・泌尿器科クリニックの改装計画

Remodeling Plan of dentistry and Urinary Clinic

AD01 青野 壮一郎

指導教員 比留間 真

1. 研究目的

病院を想像すると殺伐としている空間か、不安な感情を思い浮かべる。近年そのような状況を改善しようと、デザイナーズクリニックという煌びやかな医療施設が増えてきている。そのような施設は視覚的なデザインに重点を置くため、ただおしゃれで新しいものになりがちである。しかし患者の多くはお年寄りだ。たしかに病院らしさが少ない分、不安や苦痛は軽減されるかもしれない。だが一般的なクリニックのもつ親しみや安心感が無視されているのではないだろうか。そこで医療施設として快適な空間とは何か考える。

2. 調査と分析

現在、泌尿器科と歯科を診療している平野クリニックをモデルとして研究する。院内空間は普通の医療施設である。ここでは来患者数が開院時の想定より多くなり、その増加に伴い1人あたりの待ち時間が増えスペースの減少に繋がっている。問題となっているのが動線である。通路に座れるスペースを増やしてあるため、すれ違うのに少々困難である。しかも患者と職員の動線が交わり、受付と診察室が離れているため職員間での情報共有、業務提携が乏しい。そのため、診察時間が延長し更なる待合スペースの減少に繋がっている。以上の問題は、物理的に待合スペースを拡大しても院内動線の交差による業務効率の低下、待ち時間の延長が改善されないと判断した。

3. コンセプトの立案

アメニティ向上を目指すにあたって、動線計画を再構築して業務効率化を図る。それにより、空間に温かく安心できるコミュニケーションが生まれる。病院特有の緊張や不安、ストレスがそれにより軽減されると考え、「コミュニケーション」を主体にデザインする。

4. デザイン展開

・動線

受付、診察室、処置室、トイレの順に間取りを変更。トイレを除く各部屋に職員専用の扉を設け、患者との動線を区別。この職員動線の確保によって情報共有率が上がり、そしてカルテの受け渡し

もスムーズになる。業務内容や診察数の違いから泌尿器科と歯科を分ける。歯科受診のみの患者は受付と一角にある待合スペースから移動することなく受診可能な間取りにし、泌尿器患者との動線を区別する。動線交差によるコミュニケーションが生まれないためスペースに余裕ができる。合理化によって処理がスムーズになり職員同士は余裕のあるコミュニケーションが可能となるので信頼関係がより深まり、業務効率化に繋がる。

・内装

患者と空間が最初にコミュニケーションをとる場所であり、第一印象に繋がる。今までの印象を守るために基調となっていたサーモンピンクを泌尿器側に使う。歯科は泌尿器科とは違いオープンな空間でもプライバシーの感覚に問題がないと判断し、クリニック内で唯一窓がある一角に歯科診察室の入り口と歯科待合スペースをつくる。そこではパステルブルーを使用してクリアな印象を与える。また、木目調の床やソファを使用することで、安心感や親しみを与える。患者同士も言葉は交わさないが、不安のない空間でお互いがいることにストレスを感じない。待合の安定感によって患者に余裕が生まれる。

5. 完成図



6. 結論

提案を職員である私の父と院長である平野氏に提示した。現在抱えている諸問題が解決されそうだと好評で、内装に対しても大変好感を持ってもらえた。一言にコミュニケーションと言っても様々で、一つの空間に二つのものが存在する限りコミュニケーションが生じる。全体を通して、快適な空間を目指すには円滑なコミュニケーションが大切だと感じた。

7. 参考文献

二井るり子、梅澤ひとみ「医療福祉施設のインテリアデザイン」彰国社 2007年